

ラテンアメリカ都市物語

＝第15回＝

サンホセのいま

青木 元



サンホセ市眺望（写真はすべて筆者撮影）

私が初めてコスタリカの首都サンホセを訪れたのはもう10年以上前になる。2008年の夏、当時大学院生に成りたてだった私はラテンアメリカ研究を始めたばかりで、少しでもスペイン語が上達するよう、夏休みを活用した短期の語学留学先を探していた。その際、偶然インターネットで目にしたのがサンホセ郊外の語学学校だった。わずか一か月間の滞在では、現地に愛着を持つまでには至らず、帰国時にはサンホセだけでなくコスタリカにも再び訪れることはないだろうと思った。その後、まさか2014年と2018年の二度にわたりコスタリカに赴任し、サンホセで生活することになるとは夢にも想わなかった。

2019年12月現在、サンホセ含む首都圏には200名を超える邦人が暮らしており、中には数十年の滞在歴のある方々もいることから、わずか4年弱の滞在経験しかない自分がサンホセについて語るのも気が引ける。しかし、自分がこの国と関わったこの数年間こそ、まさにサンホセがその風景を劇的に変化

させている時期に当たり、それを間近で体験している一人として、若輩ながらもその紹介をさせて頂くことにした。

サンホセの特徴

（気候・ライフスタイル・産業・国際都市）

サンホセは周囲を山で囲まれた盆地に位置する、コスタリカ最大の都市である。その標高は約1,200mと、軽井沢より少し高めという日本人からはイメージされやすい。サンホセ含む首都圏の人口は約260万人で、つい最近500万人を突破したコスタリカの人口の約半分が集中している。気候に関しては、コスタリカが熱帯に区分されるため、サンホセでも年間を通じて最高気温が20度台後半から30度台前半を推移する。しかし、前述のようにやや標高が高めなことから、気温が高めの日でも日没後は肌寒くなる。この寒暖差により、日中は半袖、夜は長袖と同日に衣替えすることも少なくない。季節は乾季（11

月頃から5月頃)と雨季(5月頃から11月頃)に分かれる。近年は世界的な気候変動の影響を受けてか、季節の変わり目が不鮮明になりつつある。雨季の雨の降り方も、以前は昼頃からざっとスコールが降ることが多かったが、最近では霧雨が長時間続いたり、深夜帯に雨が降ったりする。

一般的なコスタリカのライフスタイルの特徴は夜が早いこと。首都サンホセの中心部の飲食店であっても、午後7時から8時には閉店するところが多い。午後8時以降は、まるで日本での深夜のような雰囲気に包まれる。その分、朝が早く、午前5時台には一部の商店やスポーツジムが開いている。私も早朝に近所のサバナ公園まで走りに行くことがあるが、その時間帯には既に多くの人々が運動をしている。コスタリカはラテンアメリカの中でも都市化が遅く、長らく早朝労働が求められる農牧業が主要産業だったという歴史が、今日の「早寝早起きスタイル」につながっているのかもしれない。事実、当国の代表的な朝食メニューの一つである豆ごはん「ガジョピント」は、かつて農民が肉体労働に従事する際に迅速かつ効率的にエネルギー補給を行うのに理想的だったといわれている。

そんなアーリーバードな生活の中で、個人的な楽しみの一つが、週末に各地で行われる「Feria Agrícola (農産物フェア)」と呼ばれる朝市である。フェアの野菜や果物は、スーパーマーケットのもの

のより安価かつ非常に新鮮である。年間を通じて気温がほぼ一定であるため、日本でのように季節ごとに店頭に並ぶ農作物が大きく様変わりすることはないが、それでも色とりどりの青果物が山積みになっている光景を見ているだけでも楽しい。

サンホセ中心部はオフィス街や観光客向けの宿泊施設が多いことから、主要産業は商業、外食産業、金融業などのサービス業となっている。かつてのサンホセの発展を支えたコーヒー生産は、近年の生産者の高齢化やコーヒー国際価格の低下などを受けて都市部近郊では衰退傾向にあり、現在はかつてのコーヒー農園用地の商業施設化や住宅地化が進んでいる。

サンホセを歩いてみると、コスタリカが北米から南米にかけての米州の結節点に位置することを実感する。文化的には米国の影響を強く受けているため、週末には老若男女問わずマクドナルドのレジ前に長蛇の待機列を作り、路上ではこれ見よがしにスターバックス・コーヒーのカップを持って歩く人々を見かける。また、国の主要産業の一つである観光業においては、年間300万人を超える外国人訪問者の約40%を米国人が占めていることもあり、ホテルや飲食店では従業員が比較的流暢な英語を話す。他方、近隣のラテンアメリカ諸国の食文化も浸透している。メキシコ系企業の乳製品やパン、グアテマラ系企業が展開するフライド・チキンチェーンも日常に溶け込んでいる。そして、歴史的に移民や難民を多く受



コスタリカの伝統料理ガジョピント



週末の朝市のようなす



各地で見られる国外からの移住者の商店(上:ベネズエラ食堂、下:エルサルバドルの伝統食ププサ販売店)

け入れてきたことから、首都サンホセでは国内で30万人を超える（不法移民を含めると倍以上といわれている）ニカラグア人をはじめ、エルサルバドル、コロンビア、キューバ、そして近年はベネズエラなどからの移住者が暮らしており、各地で彼らの経営する商店を目にすることができる。

近年の都市風景の変化

私が最初にコスタリカに赴任した2014年頃から、サンホセの景観は大きく変化し始めた。まず、この数年間の高層ビルやマンションの建設ラッシュが挙げられる。私が暮らす市内西部の国立競技場周辺地域だけでも、2014年以降に建設された高層建築物は5～6棟ほどあり、現在もヒルトン系列の高層ホテルなど複数のビルが建設中である。同ホテルは中米で最高層の建築物（38階建て140m）となる予定である。同ブームの背景には比較的短期滞在の外国人住民の増加や、都市人口の急速的な増加による渋滞の深刻化により、伝統的な庭付き一戸建て住宅よりも、手狭な集合住宅ながらも職住近接を叶えてくれる住居の需要の高まりなどがある。しかし、本来の都市計画ならば、高層建築物の増加と共に周辺の道路網も再整備されるべきなのだが、サンホセでは建物だけをピンポイントで設置して終わることが多いため、今のところ高層ビルの増加は渋滞の悪化を招いているだけとなっている。

市民による日々の経済活動も都市風景を変えた。その代表例が、合法化以前にサンホセを中心に急速に普及した、UBERに代表される一般人による配車サービスである。現在、国内のUBERのユーザー登録者数は約80万人、ドライバー登録者も2万人を超えている。むしろ当地ではタクシーも利用可能だが、私が訪問したことのあるラテンアメリカ諸国と比べても、そのサービスの質は高いとは言えない。整備

不良の車両が目立つだけでなく、運転手による信号無視やスマホを操作しながらの「ながら運転」が横行し、あまりプロ意識を感じない。最近では減ったが、数年前までは料金メーターを客の目の届かないところに置く又は設置さえしていないケースも散見された。もちろん、快適なサービスを心がける運転手もいるが、彼らの地道な努力は一部の劣悪な運転手が相殺してしまっているのが悲しいところだ。一方、UBERはドライバー情報が事前に確認できるだけでなく、自宅や職場といったピンポイントの送迎もスムーズで、料金も事前の提示額から大きく変化することはない。そして、サービス提供者と享受者が互いに評価をするシステムなので、相互にコモディティ意識が高くなる。その安全性や快適さからか、特に女性や観光客にとってUBERは至便のようだ。

その派生の宅配業に関しても、日本でもおなじみのUBER Eatsをはじめ4社ほどがサンホセ周辺で競合している。これらのサービスのおかげで、かつてはちょっとした食料調達のためにも車を出さざるをえなかったが、今では自宅にいながら配達を待つことができ、夜間や雨天時には非常に便利なツールとなっている。短い空き時間を活用して従事することが可能という特性からか、多様な人々が配達を行っている。やや年配の男性が半袖短パン姿でエンジン搭載の改造自転車で現れることもあれば、若い女性配達員がバイクウェアとフルフェイスのヘルメットをまわって日本製バイクに乗って現れることもある。週末の昼間なら高校生くらいと思われる少年が自転車をこぎながら運んでいる姿も目にする。彼ら宅配員は、特に注文が殺到する週末にレストラン街周辺で色とりどりの蛍光色の宅配バッグと共に待機し、注文を受けては市内を駆け巡る。

これらの新たなサービスは、この数年の国内の単純労働の減少により失業率が高まりつつある状況下



市内で建設中の中米最高層ビル（ヒルトン・ダブルツリー）



レストラン街周辺で待機するUBER Eats配達員

で（現在 11% 台）、一部の人々にとっては生計を支える重要な手段となっている。配車サービスに関しては、その普及と同時にタクシー業者との間で軋轢を生んできたが、もはやこの動きは不可逆的であるため、現在国会では合法化に向けた準備が進んでいる。

深刻化する都市交通問題

（公共交通の発展と渋滞の解消を目指して）

気候も穏やかで比較的治安もよいサンホセだが、やはり負の側面もある。その筆頭が前述の慢性的な交通渋滞である。これは近年のラテンアメリカ諸国の都市に共通する問題でもある。特に周辺諸国と比較して経済力が高めのコスタリカでは、自家用車を購入可能な層が多く、2018 年の 1,000 人あたりの乗用車の所有台数は 231 台と、ラテンアメリカではアルゼンチン（315 台）、メキシコ（278 台）に次いで第 3 位につけている。その割に首都サンホセの道路網は旧来の構造のままで、一方通行路や袋小路が多く、立体交差も数えるほどしかない。また、道路の質が劣悪であるために頻繁に穴が生じ、常にどこかで修復作業が行われ通行の妨げとなっている。市民によれば、「雨が降れば道路に穴があくのは当然」らしいが、その雨垂れ石的な説明に未だ納得できない。これらの要因から、必然的に渋滞は悪化し、通勤・帰宅時間帯には市内の数キロメートルの距離を移動するのに 1 時間以上要することもある。前述のコスタリカ人の早起き傾向は、早めに自宅を出ないと就業開始に間に合わないという事情もある。現在、市内の一部ではバス専用車線の設置や、自転車やキックボードの貸出サービスの拡大を通じた渋滞緩和が図られている。

そもそも市民がマイカー通勤を余儀なくされているのは、公共交通の利便性が低いことも要因である。鉄道に関しては、スペイン製の中古ディーゼル車両



市内を走るディーゼル列車

の走る路線が、市内中心部から 3 方面に向けて伸びている。しかし、沿線には乗用車と並走する区間が複数あることから、事故や渋滞を考慮して平日は通勤及び帰宅時間帯にしか運行されていない。さらに単線であるため輸送量にも限界が有り、大幅な渋滞の緩和には貢献していない。将来的には現在のディーゼル車両から電気走行車両に置き換える計画が進んでいるが、現時点（2019 年 12 月）では複線化と 5 分に 1 本のダイヤ実現を目指すくらいしか明らかになっていないため、実際のインパクトは未知数である。

これらの事情により、現在のサンホセの交通の中心はバスとなっている。そのバスも、バス停には時刻表や路線図が示されていないことが多く、市民でさえ日常的に使うルート以外の路線網を把握できないような状況となっている。そもそも可視的なバス停があれば良い方で、何もない場所に不自然に人が立っていることで、そこがバス停と判明することもある。この数年間、乗客の乗降時間短縮と強盗対策のために運賃の電子支払いシステムの導入が散発的に話題に上がるが、具体的な進展はみられていない。

今後の展望

2018 年 5 月に発足したカルロス・アルバラード政権は、前述の鉄道電化だけでなく、電気自動車含むエコカーの普及にも積極的に取り組んでいる。そのため、徐々にではあるがサンホセ市内でも電気自動車の充電スタンドを見かけるようになってきた。現在、コスタリカは「2050 年までのカーボン・フリー（脱炭素化）の達成」を目標に掲げている（つい最近までの、「2020 年までのカーボン・ニュートラル（二酸化炭素の排出量と吸収量の均衡）達成」はうやむやとなっているが）。これら交通の電化プロジェクトはサンホセの風景を一層変えうるだろう。さらに野心的なことに、サンホセはあらゆるハイテク機能を駆使したスマート・シティ化も同時に目指している。実際にはサンホセでも未だに停電や断水が頻発している地域もあるため、このような一足どころか二足、三足飛びの目標を聞くと気が遠くなることもある。それでも、将来の都市像が語られる度に、つい背伸びしがちなこの街がきらいではない。

（本稿は、著者の個人的な見解である。）

（あおき げん 在コスタリカ日本国大使館 経済班専門調査員）



『経済学のパラレルワールド 入門・異端派総合アプローチ』

岡本 哲司・小池 洋一編 新評論
2019年11月 527頁 3,500円+税 ISBN978-4-7948-1140-0

現在世界の経済学は市場の役割を重視する新古典派経済学が主流で、大学でもマクロ経済学にしてもミクロ経済学系統の数学的な科目が占めている。かつては現実の経済をより普遍的に説明し将来のあるべき経済の姿を示すかを競って、マルクス経済学、ケインズ経済学はじめ多くの理論があった。本書では「異端派経済学」と呼ぶ新古典派以外の経済学のうち代表的なものを、初学者にも分かり易いように解説している。

ラテンアメリカは実は多くの異端派経済学が生まれた地域で、ラテンアメリカなどの低開発を説明するためのものであったフランクなどの従属論、一次産品価格の傾向的低下から脱するために工業化の必要性を説いたプレビッシュの議論、一次産品輸出経済や大土地所有などの構造問題に低開発やインフレなどのマクロ問題の原因を見出した構造派経済学（著者のブレッセル＝ペレイラもその一人）などを生み出している。

15人の経済学研究者による論考を、ラテンアメリカ経済を専門としていた故佐野 誠新潟大学教授を追悼し編まれた、知的刺激を受ける新古典派経済学とは異なる並行世界（パラレルワールド）の論集。
〔桜井 敏浩〕



『トウガラシ大全 ーどこから来て、どう広まり、どこへ行くか』

スチュアート・ウォルトン 秋山勝訳 草思社
2019年9月 312頁 2,000円+税 ISBN978-4-7942-2414-9

幾多ある中でも最も広く世界で使われているものの代表的な香辛料がトウガラシだが、米大陸に到達したモンゴロイドがメキシコ南部で紀元前 7000 年から料理に使っていた。原産地から早い時期に南米へも伝わり、インカ建国神話の中にも登場するが、スペイン人征服者によって欧州に伝達され、ポルトガル人によって瞬く間にアフリカ、南・東南アジア、中国、日本、そして朝鮮半島にまで、行く先々の土地に適した品種を生み出し、様々な郷土料理が作られ、中国では貧しい者も口に出来る食べ物と言われるまでに普及した。メキシコ料理の影響も受けた米国南部ではチリコンカンを生み出し、トウガラシソースは家庭ではもちろん米国で商業生産されるタパスコを含めカリブ海周辺産のホットソースは世界中で人々を魅了している。

世界がファーストフードという食のグローバリゼーションに支配された現在、トウガラシこそジャンクフードの解毒剤になると主張する、食物史に通暁した英国の作家による奥の深い香辛料トウガラシを多角的に論じた本書の“適度な辛さ”は大いに楽しめる。
〔桜井 敏浩〕



『テオティワカン ー「神々の都」の誕生と衰退』

嘉幡 茂 雄山閣 2019年4月 202頁 2,600円+税 ISBN978-4-639-02642-6

テオティワカンはアステカ以前のメソアメリカの中心であり「神々の都」を意味する。本書はその主要構造物の位置、その図面、編年表とともに豊富な考古資料を基に、誕生から衰退までを描いた都市研究史。

なぜピラミッドは造られたのか、地下界の認識、メキシコ考古学とナショナリズムの関わりから説き起こし、神々の都での政治体制、世界観と国家形成に向けた戦略、続古典期と土器の起源、メキシコ中央高原における各地域の動向をテオティワカンの衰退までを、メキシコ中央高原における交易モデルにより経済活動と多層的交易システムの枠組み、その中で重要な黒曜石の供給地変化と利用、搬入土器の種類、時期と器形に見られる傾向を分析して、「下位交易システム」の実体を論じ、これらの研究を総括して国家主導型交易システムの功罪を纏め、なぜテオティワカンは衰退したかを考察している。テオティワカンが我々とは異なる世界観を持っていたこと、その衰退要因が交易システムの考察からのみでは理解出来ないことを指摘し、著者の結論を述べている。
〔桜井 敏浩〕



『パラグアイのおかげの話 —南米パラグアイに起こった奇跡と魅力』

佐々木 直 文芸社 2020 年 1 月 251 頁 1,800 円＋税 ISBN978-4-286-21171-8

主人公の前原弘道氏は 1937 年生まれ、20 歳の時に現在の広島県福山市から父親の決断で一家を挙げてパラグアイに移住した。南部の都市エンカルナシオンから原生林の中の土地に入植したが、父は山奥では将来性がないと見切りを付け直ちに首都アスンシオンから近い地に移転し野菜作りを始めた。トマトやバナナ等の栽培、牛の酪農を試行錯誤で行ってきたが、養鶏を始めたことが転機となり今では 500ha の自社地で“YEMITA”（黄身）ブランドの卵を生産、パラグアイでの販売シェアが 6 割以上にまでなっている。それに至るまでは弛まぬ努力と勤勉、工夫の賜物だったとふり返る。2003 年には北部チャコ地方での牛の牧場経営にも進出し、三代目の勝彦氏を中心に 6 か所で計 105 千 ha の土地を確保し 45 千頭を飼育するまでに発展させ、大豆、トウモロコシ、ソルガムなどを栽培する大農場も併設した。養鶏施設のある前原農場とは自家用飛行機で往復する規模にまでなり、亡父の思いを实らせたいと、前原農場の南端の小山には「御影城」と呼ぶ日本の城を造営した。近年は移住地ごとにある 9 つの日本人会で構成しているパラグアイ日本人会連合会の会長にも選ばれ、任期中の 2016 年の日本人移住 80 周年式典の祭典委員長も務めるなど、日系人社会と移住者を迎え入れてくれたパラグアイとの友好のために様々な公的活動も続けている。

本書は、前原家からの聞き取りと現地取材によってノンフィクション作家が取り纏めた自伝風ドキュメンタリーであるが、移住者が先見性と工夫によって事業を成功させていく過程もみることができ、多くの写真とともに日本人移住資料としても興味深い。

〔桜井 敏浩〕



『シンコ・エスキernas街の罫』

マリオ・バルガス＝リョサ 田村さと子訳 河出書房新社 2019 年 9 月
280 頁 2,500 円＋税 ISBN978-4-309-20782-7

1990 年代後半のペルー、フジモリ治下で、政権と軍警との調整役として大統領顧問という表に出ない役職ながら政権運営やフジモリ三選のために辣腕を振った黒幕、文中ではドクトルと呼ぶモンテシノスの工作を、スキャンダルに巻き込まれた鉱山王とその妻、その友人である弁護士夫妻の行動、暴露雑誌の発行者の殺害と後継者となる女性レポーターとカメラマンなどを表に出てくる主人公にして、最後はその女性編集長がドクトルとの取り引きの秘密録音の雑誌掲載という命賭けの逆襲で「フジモリとドクトルが刑務所に入るなんて、誰が想像できたでしょう」との結末に至る、ノーベル文学賞受賞者がと驚く鉱山王夫婦のやや異常な性愛、ポルノ風描写も出てくる一見通俗小説のドラマだが、もとより複数のストーリーの断片を再構成して全体として物語にするなどの、著者ならではの文学となっている。

フジモリが独裁を維持し三選を果たすべくドクトルに手段を選ばぬ工作、買収、恐喝をさせてきたことを再三ほのめかして、1990 年のペルー大統領選挙の決選投票でフジモリに完敗した著者バルガス＝リョサの怨念を感じさせる部分もあるが、巻末に記者による当時のペルー政治の背景と書名の由来の適切な解説がなされている。

〔桜井 敏浩〕